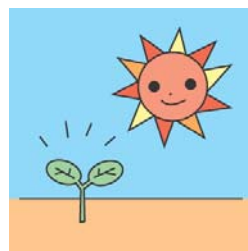


ちくちく通信

2013 盛夏号

発行:ちくちくの会 (<http://chiku-chikunokai.jimdo.com/>)



平成 25 年 7 月末 現在

会員 **68** 名 で活動しています

これまで **32** 件の医療機関さまに
お洋服・型紙を寄付しています

※ダウンロードのみ含む

(平成 24 年 8 月比)

会員 **+13** 名、寄付先 **+7** 件)

交流会 (報告とお知らせ)

前回以降、昨年 11 月と、今年 3 月に開催しています。
11 月は、少人数での”ちくちく”でしたが、手を動かしつつ、とりとめのない話をして、それはそれで穏やかないい時間のように感じました(運営委員より)。



次回、開催は未定です。日程は、HPにてお知らせしますので、時々チェックしてくださいね。

活動は広がっています

毎回、右上に会員数と、お洋服を提供した医療機関の数を掲載しています。この 2 年間で、**会員数は 2 倍、提供医療機関は 3 倍**になりました。

活動は少しずつ広がってきています。

会員のみなさんには、今後とも活動へのご参加をよろしく願います(もちろん、無理のない範囲で!)

ありがとうございました

平成 25 年 1 月

活動への支援としてご寄付を頂戴しました。
ありがとうございました。大切に使用させていただきます



※ちくちくの会は、会員のみなさんのボランティアで成り立っています。活動にあたっては、郵送費、生地購入の他に、交流会の開催、勉強会への参加などで資金が必要になります。そのため、会の趣旨にご賛同いただける方は、活動への応援をお願いしています。詳しくは、HP「活動にご協力ください」をご覧ください。

遺族会ネットワークへの参加

第3回 (H24,11,23) ・ 第4回 (H25,6,30) 北梅田 ハートンホテルにて

近年、多くの遺族会が発足し、活動しています。

それらが個々の活動にとどまらず、有機的に「つながり」、情報を「つたえ」、そして知恵を出してお互いを「そだてる」。そういった形になるようにネットワークを結ぼう、高めあおう、というのがこの会の趣旨です。

ちくちくの会、もお誘いいただき、運営委員が参加しています。

勉強になります！ これからも、よりよい運営を目指します。



天使ママ・パパからの声 (第6回)

今回は、大阪在住の天使パパからの声を掲載します。



私は44歳の会社員です。妻は37歳で結婚3年目です。
二人は仲が良く、毎日が幸せでした。でも、なかなか子供が授からないのでクリニックに通い、タイミング療法をしたりしていましたが、半年を過ぎたころ幸いにも自然妊娠をむかえ、二人で喜びました。

パパより 赤ちゃんのご紹介

平成24年2月27日 (月) 午前8時19分
胞状奇胎の為、発育が14週でとまってしまった小さな我が子を17週と3日でお産しました。性別はどちらかわからなかったけど、私たち夫婦にたくさんの想いや出会いをくれた…そんな事に感謝してつけた赤ちゃんの名前は「**恵**」といいます。

それから、妻の念願のマタニティ生活が始まりました。産婦人科に行ってエコー写真を見たり、子供服売り場で時間をつぶしたり、名前の付け方の本を必死で読んだり、と何もかもが新鮮で楽しそうでした。そして、そんな妻を見ている私も幸せでした。

ただ、気になることがありました。妊娠一か月目のころから、おなかに痛みがある事でした。妻はつわりの経験がなく、「こんなに痛いかなあ」「こんなにつらいかなあ」と弱音を吐くこともありましたが、「この子のために頑張るわ」と痛みを耐えて笑っていました。私も痛みは心配でしたが、お医者さんは「順調です」と言っているし、エコーに赤ちゃんがちゃんと映っていたので、それを順調だと思っていました。

～異変～

妊娠二ヶ月たったそんなある朝、私はいつものように仕事に出かけました。妻は、定期健診で病院に出かけました。ホームで電車を待っている時に妻から電話が入り、泣きながら一言「ごめん、すぐきて」と…。その日のうちに紹介を受けた総合病院に行き、診察を受けました。診断は「部分胞状奇胎」と言う病名でした。胞状奇胎とは核のない卵子に精子がくっついて、赤ちゃんのないまま胎盤が育つ状態で、今回の場合は双子のうちのひとつがそれになった為に片方は赤ちゃんで片方は胞状奇胎＝部分胞状奇胎と説明されました。エコーに赤ちゃんが映っていたのですが、栄養がいなくなり発育がとまって、小さく痩せていたのです。先生は、産む選択も不可能ではないが大変なリスクがある、と説明されました。妻は、ボロボロ泣きながら、必死に先生の話聞いていました。「不可能ではない」という言葉を唯一の希望にして、その日は二人で家に帰りました。

～覚悟～

妻は産みたいという思いが強く、その気持ちもわかりましたが、私は反対でした。出産によって妻を危険にさらすことはできないので、どうやって説得しようかとそればかり考えていました。そんな時、妻はネットで病気のことを調べていると、自分と同じ症状の人のブログを見つけました。そのひとは産む選択をしてがんばりましたが、結果は駄目でした。他を調べても「リスクが高い」「母体に悪い」「遺伝子異常率が高い」とよくない事ばかり書かれていました。妻はいろいろ調べているうちに、今回の出産はほぼ不可能であることに気づきました。そしてわたしに、「今回はあきらめる」と言って泣きました。

私は子供をあきらめる残念さよりも、どうすれば妻を慰められるか、それしか頭にありませんでした。でも、何を言っても気休めにしかならないことがわかっていたので、どうすべきか悩みました。そしてその週のうちに手術の日取りが決まり、手術3日前に入院しました。

～出産～

妻が入院した日の夜、私は仕事を終えて病院へ行きました。どう声をかけようか考えながら病室に入ると、妻の表情が明るいことに気がきました。話を聞いてみると看護師さんが、「**赤ちゃんの為に服を縫ってあげてね**」「**出産後は赤ちゃん写真を撮ってお風呂に入れてあげましょうね**」と言ってくれたと、嬉しそうに話してくれました。その看護師さんの言葉や気遣いで、私たち二人はものすごく救われました。わが子に、なにもしてあげることができないと思う気持ちが少し和らぎました。妻と私は、見よう見まねで初めて、我が子の小さな服を作りました。



出産の日、私が病院に行くと、その少し前に無事出産を終えていました。
妻の横には、小さなわが子がいました。布にくるまれて、まるで生きているようでした。
そして、不思議と悲しみよりも対面できた喜びがありました。妻もうれしそうに、「かわいいかわいい」と愛おしそうにわが子をなでていました。

看護師さんと一緒にお風呂にいれたり、作った服を着せて写真を撮ったりしました。
その日は、私と妻とわが子三人で個室に一泊しました。
「家族の思い出を作ってください」と看護師さんの提案でした。
そして一週間後、親族一同と一緒にお寺で供養して、お別れをしました。
お別れはすごく悲しかったのですが、わが子にやれる事をしてあげられた事に気持ちが救われました。



～その後～

妻は、インターネットや看護師さんの話から、「ちくちくの会」の存在を知りました。
会に参加をすると同じような想いをされている方々に出会いました。
お互いの話をシェアし、一緒に服を作るという空間は妻にとってかけがえのない
ものです。
まだまだ世間一般では、死産をタブー視する傾向にあるように思います。
誰もが安産を望んでいるなかで、急に訪れる死産は少なからず誰にも可能性が
あると思います。そして、出産がたとえ死産であっても、母親のわが子への思いは一緒です。

今後、私たちと同じ境遇の方にケアをしていただける看護師さんや病院、
そしてこの「ちくちくの会」が広まっていくことを私は期待しています。

平成 24 年 11 月

編集後記

残暑お見舞い申し上げます。
今年の夏は、日本列島全土が異常気象！
ゲリラ豪雨や冷害に見舞われる一方、35度を
越す猛暑日が連続したり、水不足に悩まされる
地域もあるようです。

体調を崩しやすい時期ですが、みなさま お
体の調子はいかがですか。いつも以上に心
身の健康に気をつけて、お互い、この厳しい夏
をのりきっていきましょう。

最後に、今回前号からちくちく通信発行が大
幅に遅れ、関係の皆様にご迷惑をかけましたま
した。心からお詫び申し上げます。

(運営委員 梶原)
